

Title	書評：李光鎬著『「領土」としてのメディア：ディアスポラの母国メディア利用』慶應義塾大学出版会、2016年
Sub Title	
Author	小玉, 美意子(Kodama, Miiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.145- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：李光鎬著

『「領土」としてのメディア——ディアスポラの母国メディア利用』

慶應義塾大学出版会、2016 年

小玉 美意子

ディアスポラ（ここでは、母国を離れて長期にわたって外国で暮らす人々）のメディア利用行動を分析対象として調査を行い、その行動や影響を考察したものである。本書で著者が述べている「メディアが領土を局所的に広げている」という発想が面白く、その点に関心を持った。

近年のメディアの発達、中でもインターネットの発達は、国外に暮らす人々にとって心理的に大きな変革をもたらした。若者の間では LINE なしのコミュニケーション生活はあり得ないほどになっているし、SNS という言葉を聞かない日はなくなった。これらは世界のどこにいても電波が届くかぎり接続可能であり、双方が登録していれば、「知り合いではありませんか？」と聞いてきてくれさえする。一緒に遊んだ竹馬の友にも、現在の友人にも即時につながる。

著者は、2015 年、カナダのブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバーとその隣接市で、韓国出身者と日本出身者を対象に調査を行った。筆者は 1972-75 年にサンフランシスコに住み、似たような環境にいたことがある上、日系新聞の調査を行ったこともあるので、特にこの書に興味を抱いた。

従来のこの種の研究の中心的関心は、東アジアからアメリカに行った場合、ディアスポラのホスト社会への adaptation（適応）や assimilation（同化）にあった。すなわち、現地の社会環境になれ、その中で違和感なく行動でき、現地の人にも「受け入れられる」ことがその人たちの究極の目標であり、それが「善」と考える傾向があったからである。しかし現在、多様性が尊ばれる時代になってその前提は薄れ、それまでに移住者が背負ってきた文化とともに生きることが、現地でも受け入れられるようになってきた。使われるメディアの飛躍的発達がみられるようになり、研究者の関心も幅が広がってきており、本書の研究もその一つととらえていいだろう。

第 2 章で、韓国系ディアスポラが韓国系メディアをどう使っているかについて、14 人に対しデプス・インタビューを行った結果が書かれている。それぞれのメディアの使い方について答えているが、その中で多くの人が「カナダに暮らしていても韓国にいるのと変わらない」という言葉を頻繁に口にしていたという。これには調査地がバンクーバーであることも、影響しているかもしれない。当地は東アジア系の人々が昔から多く居住し、アジア・マーケットなど、アジアの産品が手に入りやすいという環境もあるであろう。しかし、「韓国メディアが作り出す象徴的な環境が、場所だけカナダにいる感じ」を作り出しているという。すなわち、著者は、

小玉美意子「書評：李光鎬著『「領土」としてのメディア——ディアスポラの母国メディア利用』
『三田社会学』第 22 号（2017 年 7 月）145-147 頁

「テレビ画面を通じていつでも見られる韓国ニュースやドラマの利用が、ディアスポラの人々を母国の『今』のタイムゾーンに引きこむだけでなく、(中略)懐かしい過去へといざなうのである」とする。その上、現在ではインターネットやスカイプを通じて、母国の親しい人と祖国にいる時と同じように会話ができる。そこだけをとると、カナダの中に韓国社会ができているかのようだ、というわけだ。

つづいて第3章で、日系ディアスポラについても、同地で同様調査を行った。彼らもインターネットを通じて日本のドラマやニュースを見ている。ただし、韓国にはテレビ番組の合法的な無料のオンデマンドサービスがあるのに対し、少しの例外を除いて日本のそれはないことを残念がりながらも、「日本にいた時よりも、カナダに来てからの方が、日本のテレビをよく見ている」と言い、かなりの人が主にバラエティやドラマなどを見ていると答えた。テレビで日本のニュース番組をみる人は少ないが、インターネットのポータルサイトで日本のニュースを見ることは日常的に繰り返される行為のひとつになっているという。著者が注目するポイントは「日本のメディアを情報源として利用することが、ただ単に日本のことを知るということに留まらず、(中略)日本という地理的な場所に居るということに密接に関連しているという点」である。その意味は、日本はニュースが早く、情報を現地の人よりも先に得るためにも日本のメディアが欠かせないということにある。現地のメディアによるニュース番組などは多く見られているが、それはニュース情報を知る目的よりも、現地の人との話題や「英語学習」の為に見るのが主目的とのことで、出身国のメディアから離れられないのは、韓国人と同じだ。

第4章「場所・メディア・ディアスポラ」では、先行研究の文献を引きながら議論を深め、結論に導く。例えば、Fornäs (2007)からの引用により、メディア利用はすべて空間的に文脈づけられるとして、三つの可能性を上げる。一つは、メディアは利用する場所によってその内容の理解や経験は違ってくる。二つめは、メディアは場所と空間を表象しそれらに意味を与えること。三つめは、メディア利用が社会的空間を作り出していること。これについては、例えば外国で母国の人と携帯電話で話す時「メディアは一つの場所の中に、『ここではない別の場所』との間で社会的相互作用が行われる新たな空間を作り出す」と言っている。これらのことが、冒頭の「領土の局所的拡大」につながるのである。

一方で、メディア研究者は一般的に、電子メディアの発達により「非場所」の増加を主張することも多い。しかし、このように、メディアは場所なき世界をもたらすというのではなく、メディアが場所の二重性(あるいは、多重性)をもたらしているというのは、面白い指摘であろう。ディアスポラとメディアをつなぐキー概念の一つは「場所」であり、一つの場所の中に「ここではない別の場所を作り、場所を二重化する」というのである。

これは、論理的にも理解できるし、私自身の体験ともつながっている。

2000年にオハイオ大学にサバティカルで滞在したときには、国際チャンネルの中の日本語番組を見るのが楽しみであり、日本人の研究者や留学生と話すと、そこだけが日本になっているような錯覚にとらわれ、私に癒しを与えてくれた。しかも、その時はすでにメールができる

状況だったので、いつも日本の家族や友人とつながっており、寂しい思いをすることはなかった。1972年に初めてアメリカに留学した時には、日本語のメディア放送はなく、しかも電話が非常に高価で、年に一度ぐらいしか掛けなかった。メディアが発達していないそのころ、サンフランシスコという同じく西海岸の地にあっても、そこに米国以外の場所を作り出すことは限られていた。

そのことは、筆者が調査した戦時中発行されたコロラドの日系紙『格州時事』を思い出させる。彼らは、ロッキー山脈の収容所に入っている間、その記事を読むことで日本社会とのつながりを再認識するとともに、在米同胞の消息を知り、同時にアメリカ政府の政策を知った。このメディアこそ彼らが生きる力となったのである。

本書に書かれた世界は、今後の、様々な研究の展開可能性を考えるとわくわくする。例えば、日本で韓国ドラマが流行った時、在日本の韓国人はどのように見ていたか、それは日本人とはどのように違うのか。日本で英語の番組を見ているとき、日本人と英語国から来た人とはどのような反応の違いがあるか。英語の国際性を考慮すると、日本語や韓国語などの地域言語とは違いがあるかもしれない。また、ポケモンはできるだけ国籍不明につくことで世界的な成功を収めたともいうが、そういった普遍性を目指して成功したものはどういう意味を持つのだろうかなど、考え始めると興味は尽きない。

ただ、メディアが二重性をもたらしているものに「領土」という言葉をあてていることに対しては、もう一考あっても良さそうだ。使われている文脈から私には、著者の言わんとする意味は良く分るし、この言葉にはインパクトがある。しかし、領土というと「国家の主権が及ぶ国家領域のすべて」（国際法辞典）、「①領有している土地、②国家の領域を構成する部分で、国家が排他的に支配する土地」（スーパー大辞林）という定義もあるので、こういう言いかたをすると米国ではトランプ大統領から排斥の対象にされてしまうかもしれない!? 意味の上でさらに適切な言葉があるかもしれないし、一方、現実的に一国多言語の国や、違う国で同言語を使う違う場合もあるので、今後の研究の発展と普遍性を考える上では、別の言葉を与えることも考えられるのではないだろうか。

【文献】

Fornäs, J., Ganets, H., Becker, K., & Bjurström, E. (2007). *Consuming Media Communication, Shopping and Everydaylife*. New York: Berg Publishers.

(こだま みいこ 武蔵大学名誉教授)